Gender Hand Book vol.2
WHITE RIBBON CAMPAIGN JAPAN × ウィングス京都

#ボクらは誰も傷つけたくない

「男らしさ」の謎を探る冒険

20××年、日本。
教室で、部室で、家のリビングで。
「男の子」たちは、「男だから」と競い合い、我慢し、
「男のくせに」とからかわれ、
自分や誰かを苦しめる「暴力」に駆り立てられていた――。

「どうしてボクたちは戦っているのか？」

ふと立ち止まって、考えてみた、ボクたち。
もう男の子じゃないけれど、
かつてのあのしんどさの「なぜ？」を知ることで、
少し生きやすくなるかもしれない。

今、誰かを傷つけなくてよくなるかもしれない。
今、苦しんでいる男の子に寄り添えるかもしれない。

もう男の子じゃないあなたも、男の子だったことがないあなたも、
悩みながら、迷いながら、一緒に冒険の旅に出かけよう。

「自分と誰かを傷つけない」ために。

INDEX

P.03 20・30代になったボクたちが思春期の謎ルールを振り返ってみた
P.06 男子集団解説
P.08 「男らしさ」が誰かを傷つけるとき
P.10 男の子とデートDV
P.12 部活やいじめにも性暴力が潜んでる件
P.13 男性が「弱さ」でつながるということ
P.14 「男らしさ」が、暴力に向かわないために
表紙 指南書 ～「男らしさ」を考えるブック・WEBガイド～

CAFE

20・30代になったボクたちが思春期の謎ルールを振り返ってみた

～男同士のしんどかった話～

下ネタでカースト形成

中学校入りたての時、下ネタワード知ってたらエラいみたいなの、ありませんでした？

一同：あぁ！……。

「コンドーム」とか「中出し」とか。知らんかったら、「えー？お前、みんな知ってるよな？」って言われたり。でもその一方で下ネタ話に入れた時は、自分もみんなと同じ感覚を持ってるんや、って安心感とか心地良さみたいなものもあった。

マスターベーションの仕方とか、「こうしたら将来、インポ（勃起不全）になる」「こうしたら将来セックスした時に長く持つ」みたいなね。嘘か本当かもわからないけど、今でも覚えてます。

私は「陰キャ※1」というか奥手なグループだったので下ネタ話とか全然なくて。でも逆に全く接しなかったら、反動でそういう話題に対して嫌悪感が湧いてしまったり。そういう話してる人たちに対しても線を引くし、こっちが乗らないと距離置かれるし。男なら詳しくて、興味があって当たり前っていう感じが居心地悪かった。

特に「陽キャ※2」の人と一緒にいる時は、なんの体位が好みか、みたいな話でマウンティングされる時があったな。

童貞いじりみたいなのもありませんでした？

直接からかわれたことはなかったけど、メディアとかで「童貞＝非童貞より人間のレベルが低い」みたいに語られてるのは、すごいモヤモヤっとしました。

あと、年齢が上がっても、なお童貞のままだと、どんどん男としての価値が低くなる感じもありますよね。何なんや、1回でもやったらそんなすごいんかって！（笑）

ですね（笑）、でも僕が童貞の時にも引け目はあったし、非童貞になったことで、ちょっと心地良さ？みたいなのもあったんですよねー……。

次ページに続く

※1「陰気なキャラ」の略。大人しく地味なタイプを指す。※2「陽気なキャラ」の略。明るくて派手なタイプを指す。

笑いのネタで終わる保健の授業

小学校の時、他の男子はつるつるなのに自分だけめっちゃ毛が生えるの早くて、あだ名も毛深いから「けぶ」とかで。まあ……しんどかったですね。

僕も周りに比べて早かったから、中学で着替えの時に「見してみー」って言われて、「なんやお前もう生えてんのか、早いな」って言われる、みたいなことはあった。

常にみんなチェックのしあいというか。自分は逆に毛が生えるのが遅い方やったので、それはそれで非常に苦痛で。

「お前はおかしい」みたいないじり方ってありましたよね。知識がないと反論もできないし。

そうそう。家で性教育があったかというと一切なかったし、保健の授業とかも、生徒が笑うの分かってるから先生も笑いながらやるんですよね。

教科書を生徒が笑いながら読んだり、陽キャの人らがなんか言い合って笑ったり、先生もそれをなだめるわけでもなく、説明するわけでもなく一緒に笑って、それで授業が終わってくみたいな……。

それ苦行っすね（笑）。

あれはなんやったんやろなあ（笑）。性的な知識の情報を一番得たのは、結局友達との下ネタとかの会話でした。正しい情報源がなかったと言ってもいいのかも。

男と仲良しで「心配」され

先生とのことで言うと僕高校3年間彼女がいなくて、男と結構仲良かったんですけど、そしたら担任の先生が「ずっと男ばっかりで一緒におるけど、大丈夫か」「男が好きなんか」ってストレートに聞いてきたことがあって。そういう雰囲気を友達も読み取って、「お前そうなん？」みたいな。いや別にちゃうけどってその時はさらっと流したんですけど。なんかすごい怪訝そうな、心配する声で聞いてくるんですよね。

なんで先生が心配すんねん……！

あと、担任の先生に呼ばれて、「大学入って彼女つくるには、大学1年の夏休みまでに頑張らなあかんぞ」って言われたりとか。みんなで取り合いになるからって……。

一同：えー……!?

しかもそれを言う先生がマジっぽいんですよ。そんなこと言うか！ってびっくりしたの覚えてます。僕が同性愛とかやったら、すごいなんかもっと……苦しい思いしたんかなって。ひどいな……。でも「ホモいじり」みたいなのあったな。特に男子からの排除が強かったような気がするけど。

高校生の時、そういう男の中の文化みたいなのがすごい嫌いで。その手の物を見たり聞いた時に反応する自分も、勃起も、射精も、マスターベーションも、むちゃくちゃ嫌で、なんていうか性欲を禁じてた、みたいな時期があった。

自分も、女性を下に見るような下ネタもアダルトビデオも嫌やったけど、その一方でセクシュアルなものへの生理的な反応は、思考とは関係なしに起こる、そのギャップにさらにモヤモヤしてました。

女の子と仲がいい＝付き合ってる

でも「男だろ」ってマジックワードだなあとも思って、高校の時、「あーもう疲れた。宿題できないな」って言ったら友達がさらっと「そんなん男じゃないじゃん」って言ってきて。その時、「そうだ俺は男だ、やってやる」みたいな底なしのパワーが出てきてガツガツできる（笑）みたいなことがあったんですよね。男らしさに踊らされている、とも言えるんだけど、そのおかげで頑張れた部分もあって……複雑なんです。

確かに自分の中にも男らしさへの意識はあるんですよね。彼女ができた時、友達から「ご飯おごってるん？」とか「プレゼント何あげたん？」とか、「セックスはお前が誘ってあげなあかんぞ」とか言われて、恋愛においては男が女の子をリードしてあげるもんっていうのにすごいモヤモヤしたのに、一方でおごった時満足してしまうこともあって……。

あるある。でもそれって、自分が相手を下に見ているということだと思うし、パワーバランスがおかしいってことだと思うから、それをどう崩すかっていうことには、今でも苦労する感じはあるんです。

あと女性との関係で言うと、高校の時仲いい女性がいたんですけど、周りから付き合ってんのかとか、何で付き合わへんのって、2人合わせていじられる、ってことがあったな。

確かに、中高の時は特に、男と女がつるんで話してたり一緒にいたりするとそういう関係に見られる、って感じありましたよね。

恋バナの延長で下ネタの話にさせられることも多かったかも。誰々が気になっとるとか好きやとか言ったら、「おっぱい揉みたいんやろ」とか、「セックスしたいんやろ」とか、僕の意思に関係なく、勝手に性的な方に持っていかれたり。

自分はそういう時「なんでそんなこと聞いてくんの」ってずっと黙ってたな……。お前らには属さねえぞって気持ちで、抵抗して、スルーし続けてました。

そういう時、うまく反論できたらよかってんけど、知識もないと、独特の黙り込みになるしね。それが相手には面白くないから、さらにからかってくるし（笑）。

そうそう（笑）。難しいんですよね。男らしさに疑問を持って回避しようとするほど、男性文化の中で生きづらくなるし。実は盲信していた方が生きやすいんかも。

確かに、染まるのは楽だけど、1回気付いてしまうと、信じることできないですもんね。あの時、他にどういう選択肢があったのかなあ……。

男子集団解説

男らしさ6つの生態

① マウント合戦

思春期の男子集団は、自分が「男」であることをアピールし、「男らしさ」を互いに競い合う「競技場」としての性格を持ち合わせています。そこで男らしさの証明に失敗することは侮辱や軽蔑の対象となりがちなため、男の子たちは、それを避けようと必死で男であることのアピールに駆り立てられます。

こうした競争で重視される男らしさの中身は、地域性や学校のタイプによって多少異なります。例えば「ヤンチャ」系の集団ではケンカの強さ、進学校では学校の成績が、男らしさの強弱の目安となるかもしれません。

しかし、スポーツ能力のように、ほぼ例外なく男らしさのアピールに効果を発揮する要素もあります。

② エロでドヤる

男であることのアピール競争に意外とよく用いられるのが、性に関する知識や経験談です。

ほとんどの人が性への関心を覚える第2次性徴期に、性について同世代の同性同士で話す機会を持つこと自体は大切です。ただし、問題はその語られ方です。

現状では多くの場合、思春期の男子集団で性について、冷静にホンネで語ることは困難です。

俗説的な性知識をひけらかす、性的な経験を自慢する、女性への性的な関心をアピールする——。性知識の科学的な正しさや人権感覚より、その場のノリが重視されます。

このノリについていけない男の子は「陰キャ(陰気なキャラ)」と呼ばれて集団の中で低いポジションに置かれます。

③ テンプレフレーズで論破

「それでも○ンタマついてんのか」「あいつは女々しいヤツだ」——。男らしさの競技場である男子集団では、他の男性をおとしめる時に相手の男性性を疑わせたり、女性に例えたりする表現がよく使われます。

周りからこうした言葉をかけられまいと、男性たちは弱みを見せず、強がることを学んでいきます。しかしそれらの表現には、暗に女性は男性よりも劣った存在だというメッセージを含みます。知らず知らずのうちに女性を見下す意識を刷り込まれているわけです。

「男だろ」。その一言で無理してでも頑張ってしまう。一見、悪いことではなさそうにも思えますが、これもまた、「女」のように見られることへの恐れや恥、つまり女性蔑視と表裏一体の感覚なのではないでしょうか。

④ 同性愛をディスる

性的話題のノリについていけないと、「同性愛者」ではないかとの疑いを掛けられ、茶化されます。残念なことに、多くの男子集団には「同性愛嫌悪」(ホモフォビア)の風潮が残っており、「茶化し」はその典型例。同性愛者の人権を侵害する行為です。

この茶化しは、その場に同性愛者がいるとは考えもせず、冗談のつもりでしょう。しかし異性愛者でない人や、性的関心をほとんど持たない「無性愛」の人は、少なくともクラスに1人の割合でいるとされています※1。

彼らの多くは、男子集団のピアプレッシャー(同調圧力)のもと、その場をうまくやり過ごすことを強いられます。

自分の性的指向を周りに打ち明けることなく、自らをおとしめる「同性愛イジリ」や、興味のない女性への性的関心をアピールするといった、屈辱的で耐えがたい経験をしているのです。

⑤ 同調圧力と空気読み

性的少数者でなくても、男子集団のノリを苦痛に感じてきた男性は少なくないでしょう。

しかしそうした男性たちの多くも、集団のなかで思春期をやり過ごすために、自分が同性愛者と見なされないよう、他の男子と一緒になって同性愛者をおとしめる発言をしたり、女性への性的関心を過剰にアピールしてみたりします。

そうして彼らもまた、性的少数者を見下したり、女性を性的対象としてのみ強調するような文化を、不本意ながらも担ってきた側面があるのです。

またこれは、対等な相手として気負わずに、女性と接するチャンスを失うことにもつながるのではないでしょうか。

⑥ 「暴力=アリ」の心理

DV加害男性の多くが「力と支配」「暴力容認」「男性優位と女性蔑視」といった価値観に取りつかれていると言われています※2。

これらはいずれも、これまで見てきた思春期の男子集団に特徴的に見られる価値観です。

ほとんどの男性は女性に暴力を振るいません。しかし、そうした男性たちも、暴力の土壌になり得る男子集団の価値観を、多かれ少なかれ担っているのです。

だとすれば、女性への暴力の問題は、暴力を振るわない男性にとっても無関係とは言えないのではないでしょうか。

※1 「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」(2019年)によれば、回答者のうち3.3%がレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー・アセクシュアル(LGBTA)と回答している。

※2 山口のり子『愛を言い訳にする人たち—DV加害男性700人の告白』(梨の木舎・2016年)

強引な男はかっこいい……!?「男らしさ」が誰かを傷つけるとき

たたかいはおとこのしごと……?

「男らしさ」と暴力

男性優位が与える「力」

これまで、「男らしさ」は「力（パワー）」と結び付けられてきました。ここでいう「力」とは、腕力だけなく、経済力や社会的威信、相手を従わせる能力なども含みます。

実際に私たちの社会には、男性に「力」を与える要素が多く存在しています。男性の方が、腕力が強い傾向にあり、リーダーを任される機会が多いこと。職場でも地位や賃金に男女格差があり、男性が主な稼ぎ手である家庭が多いこと。そんな男性優位の社会は、女性よりも男性に「力」を与えます。

男性が振るう暴力には寛容

さらに男らしさは、時折「暴力」とも結び付けられてきました。暴力は、持っている「力」を「不当に」使って相手を自分に従わせ、いさかいを手っ取り早く収める手段です。

社会的なタテマエとしては暴力は良くないとされていますが、この社会は、女性が暴力を振るうことに比べて男性が暴力を振るうことには「寛容」です。

メディアには、男性による暴力の描写があふれています。特に、子ども向けのアニメや特撮では、「正義」のために「悪」と戦うという大義名分のもと、ヒーローが、相手を「力」でねじ伏せる姿が、「男らしく」肯定的に描かれます。

こうした文化が、男性が暴力を使うことに寛容な土壌になっているのかもしれません。

暴力が恋人間で起こる理由

背後にある依存や「甘え」

では、そんな「力」の不当な使用による支配が、恋人関係で起こったとしたら。「恋人間で起こる暴力」は「デートＤＶ」と呼ばれ、若年層がさらされやすい暴力のひとつです。

ドラマや歌詞などでよく男性が口にする、「俺のものになれ」というセリフ。恋愛関係になったとたん相手を自分の所有物のように思い込み、思い通りに振る舞わせたい、自分を常に尊重させたいという気持ちに勝てなくなる。そうした支配欲が、相手への依存や「甘え」から生じている側面も考えられます。

「ケア」を軽視し女性に求める男性

お弁当を作ったり相手を気遣ったりすることが「女子力」と呼ばれるように、世話や配慮などの「ケア」行為は「女らしさ」と結びつけられてきました。

逆に男性は、他人へのケアに消極的なだけでなく、自分の身辺を整え、自分を大切にする「セルフケア」も軽視しがちです。

その反動で、女性との交際を機に、自分へのケアを全面的に相手に求め、それが満たされないと暴力を振るったり、それを満たし続けさせるために暴力で相手を支配する……。男性の「ケアの欠如」も恋人間の暴力の一因かもしれません。

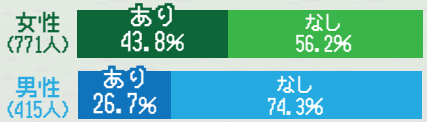
交際相手からの暴力で「命の危険を感じた」人

女性 **4.5%**　男性 **1.4%**

出典：内閣府「男女間における暴力に関する調査」（平成29年度調査）

デートDV経験の有無

（交際経験のある10代）



出典：認定NPO法人エンパワメントかながわ『デートDV白書VOL.5』（2017年）。調査対象は2016年にデートＤＶについての予防教育を受講した中学生・高校生・大学生2,825人。数値は下記の例のひとつでも経験した人の割合。無回答を除く。

殴る蹴るだけじゃない！デートDVで起きる暴力

性的暴力

嫌がっているのに体を触る・キスをする・セックスをする、避妊に協力しない、裸や性行為の写真や動画を撮る・撮りたい・送ってほしいと要求する

身体的暴力

つねったり、かんだりする、壁に押し付ける、殴る、蹴る、首を絞める、突き飛ばしたり、引きずる

経済的暴力

デートの費用をいつも払わせる、貸したお金を返さない、無理やりお金を出させる、高いプレゼントを買ってほしいと言う、バイトを辞めさせる・させない、別れるならこれまでのデート代を返せと言う

精神的暴力

バカ・死ねなど傷つく言葉を言う、体型や容姿について嫌なことを言う、別れたら死ぬと言う、お前のせいだと言う、理由も言わずに無視をする、大切にしているものを壊したり捨てたりする

行動の制限

他の異性と話をしないと約束させる、返信が遅いと怒る、1日の自分の行動をすべて報告させる、友人関係を制限する、スマホや携帯のデータを消す、服装や髪形を決めつける

出典：認定NPO法人エンパワメントかながわ『デートDV白書VOL.5』（2017年）P.9一部改変

男の子とデートDV

加害・被害と向き合うために大人ができること

阿部真紀
認定NPO法人エンパワメントかながわ理事長

「約束」から始まる、目に見えない暴力

「恋人間で起こる暴力」を「デートDV」と呼びますが、そもそも「暴力」とは何なのでしょうか。すぐに思いつくのが「殴る・蹴る」ですが、決して身体的な暴力だけが暴力ではないんです。例えばエンパワメントかながわでは暴力を5種類に分けています。（前ページ参照）

エンパワメントかながわが行った「全国デートDV実態調査」で一番被害が多かったのは「メールやLINEの返信が遅いと怒る」という「行動の制限」でした。「異性と口をきくなと言われる」、「いつどこにいるか必ず報告させる」なども全て「行動の制限」ですが、「いつどこにいるか、いつも教えてね、約束しようね」と優しい言い方をされると、それを暴力だとは気づきにくいです。

「約束」に対して一方が嫌だと言えない、嫌だと言っても聞き入れられないような上下関係や力関係がある場合、「約束」は「支配」となり、「暴力」になるのだと思います。

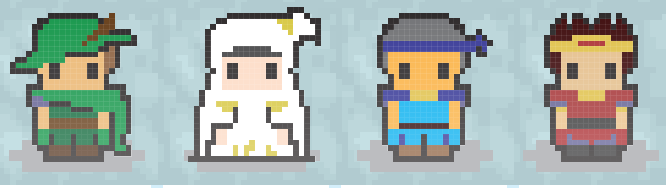
暴力は「学ばされる」

私は生まれた時から暴力を振るう人はひとりもいないと思っています。暴力は、生まれた後に「学ばされる」側面があると考えるからです。

私たちはデートDV専用の電話相談を開設して10年になりますが、電話相談では加害に気づいた男性の相談も受けています。その中で、父親が母親に絶対服従を強いている光景を見て育ったことによって、男性が女性を下に見ることや、上の者は下の者に対して思い通りにしていいということ、つまり暴力の使い方を学んできたのだと思わされることがあります。

テレビや漫画などのメディアでも、付き合っていたら男性は彼女を押し倒していいとか、「男は暴力を振るってもいい」という情報にあふれています。メディアや家庭の中で見聞きするなかで、そういった誤った「常識」が形作られていくのではないでしょうか。

また、男性に限らず、加害をした人からよく聞く言葉に「○○だったらフツウですよね」っていうものがあります。恋人だったら、女性だったら、○○してくれるのがフツウ――そんな自分の「常識」を相手に押し付け、加害に至るのだと思います。



男の子を「相談」から阻むもの

性別を問わず、被害者の気持ちに典型的なのが、「自分が悪い」という気持ちです。相手からの暴力が全て「お前が悪い」というメッセージとなり、自分が悪いから暴力を受けても仕方ないと思わされ続け、結局逃げることができなくなります。

また、男性もデートDVの被害者になりうるのですが、「男は強くなければならない」という「男らしさ」によって被害を認めにくい、「強くない自分がダメだ」と思い込み、相談しにくいということも起こっています。男性の被害の実態は見えにくいのです。

だからこそ男の子はもちろん、相談を受ける周囲の大人自身にも、自分の中にあるジェンダーや男らしさの思い込みに気づいてほしいです。関係性の中でお互いの違いを認め合う、違いを素敵なことだと思える、自分のことは自分で決められる。それが、デートDVではない対等な関係です。

大人が自分事として暴力と向き合う

デートDVに関する教職員・保護者向けの研修で、「別れさせて安心していませんか？」と伝えることがあります。デートDVはひとつのあらわれで、背景には貧困や虐待などいろんな問題があり、別れさせても、決して「解決」ではないんです。だからこそ「大人」には、被害に遭っている人、加害をしている人、双方別に、それぞれの話を上からではなく横に寄り添って話を聴いてほしい。アドバイスも要りません。とにかく黙って聴いてほしい。もしも加害をしている人の中にこれまで誰からも大切にされなかった経験があるなら、その気持ちに寄り添い、本当は大切にされていい存在であることに気づいてもらうことが大事です。大人が子どもの力を信じて寄り添うこと、子どもの力を引き出すことが、「エンパワメント」だと思います。

また、大人の方の中にも、デートDVについてお話をすると、「自分も当てはまってました」とおっしゃる方がいます。「子どもが問題を起こしているから何とかしよう」といった上から下へのアプローチではなく、自分にも起こっているかもしれないこととしてデートDVを捉えること、そして大人も自分の振る舞いが誰とでも対等であるかどうかを省みていくことが必要なのではないでしょうか。

あべ・まき　デートDV予防プログラムの開発、提供、デートDV110番の運営や人材育成を行う。NPO法人デートDV防止全国ネットワークを設立し、事務局長。
著書『暴力を受けていい人はひとりもいない』（高文研・2018年）

部活やいじめにも性暴力が潜んでる件

～男性から男性への加害～

男の子間の加害に注意

学校の部活などにおいて、支配・被支配の関係を無理やり押し付けるために、性暴力が手段として使われることがあります。

男の子同士の「いじめ」でも、性的な暴力が振るわれている場合がしばしば見られます。

性器をあらわにさせたり、いたずらをしたりする行為は、明らかに性暴力です。

男の子同士のいじめのケースに対応する場合は、性暴力があったかどうかということに、より注意を払うべきでしょう。

男性にも強いトラウマ

アメリカ合衆国のデータによれば、レイプ被害者の圧倒的多数は女性ですが、被害者の1割を男性が占めるといわれています（男性の3％がレイプ被害にあっているそうです）※1。

「魂の殺人」と言われるレイプが、女性の心身をひどく傷つけることはよく知られています。男性もまた、性暴力やレイプによって深い傷を背負い込みます。

トラウマ研究によれば、レイプによる被害者のPTSDの発症率は、女性46％に対して男性は65％に上るともいわれています※2。

また、男性への性暴力の加害者は、圧倒的に男性が多いのです。同性愛男性が加害者になるケースも見られますが、むしろ異性愛男性からのものの方が多数派であるともいわれています。

被害、想像する場づくりを

性暴力は、男女の性別にかかわらず、人の心を深く傷つけます。被害者は、自死さえ考える場合もあります。

男性に対しても、「自分が性暴力の被害にあったらどんな気持ちになるか」想像してもらう場をつくることが必要なのです。

※1　アメリカ司法統計局（1994～2010年）
※2　宮地尚子『トラウマ』（岩波新書・2013年）

男性が「弱さ」をつながるということ

男性による語り合いの実践から

西井開（ぼくらの非モテ研究会）

男性の対話グループを主催しています。活動を通じて、男性同士が語り合うことには既存の「男らしさ」や、それによる生きづらさをほぐす可能性があるように感じています。

主催しているグループ「ぼくらの非モテ研究会」では「非モテ」をテーマに、恋人がいない、性経験がないなどの悩みを持つ人同士で、『「非モテ」の苦しみはどこからくるのか』『どうすればその苦しみから逃れることができるのか』を個人の体験をもとに話し合っています。テーマによって女性の参加者も交えますが、基本的に性自認が「男性」寄りの人が参加しています。

あえて「非モテ」を厳密に定義していないため、モテない悩みだけでなくさまざまな生きづらさを抱える男性が集まります。

中には何らかの被害経験を持つメンバーもいます。私を含む参加者たちは、背が低い、運動ができない、肌が白い、恋人がいないなど「標準的」とされる男性像からずれているという理由で男性同士のコミュニティ内で「男らしくない」とからかわれ、非難の対象になった経験を持っていることが多いんです。

そういった経験を持つ者同士が出会い、話し合いを通じて体験を共有し合うことで、「男はこうあるべき」に違和感を抱いていたのは自分だけじゃないと思えたり、「これが男らしくて素晴らしい価値だ」と理想化されていたものが崩されたり、「自分はダメだ」と自己否定していたのが、自分は悪くないと思えたりする可能性があります。

また、女性や周囲の別の男性に抑圧的な行動をしてしまったなど、「加害」の経験についても話されることがあるのですが、語る人は罪悪感を抱いていたり、後悔で苦悩していることが多い。なぜそれをしたのか、どうすればしなくなるのかグループで考えていく場にもなっています。

男性は「からかい」や「いじり」という競争的なコミュニケーションでしか男性同士の親密な関係を築けないという、男らしさの価値観に縛られている傾向があり、特に教室や部活といった閉鎖的な空間でそれは色濃く出ます。男らしさを背景としたおとしめ合いではなく、不安や葛藤、失敗など「弱さ」でつながり合える場所を外につくっていくことが重要だと思います。そのつながりは意外と心地いいんです。

にしい・かい　生きづらさを抱える男性の語り合いグループ「ぼくらの非モテ研究会」主宰。臨床心理士。立命館大学人間科学研究科博士後期課程。

関連書籍
『モテないけど生きてます　苦悩する男たちの当事者研究』
ぼくらの非モテ研究会
青弓社・2020年

「男らしさ」が、暴力に向かわないために

あおる
ちゃかす
むしする
わかちあう

オトナから、「男らしさ」をずらしていく

思春期の男の子が抱える、男同士のさまざまなピアプレッシャー。科学的に間違っていることや「男らしさ」を押し付けられたり、本当は抜け出したいのに、抜け出せなかったり。

そんな男の子にオトナ（特に男性）ができることは、オトナ自身で男らしさを積極的に「ずらしていく」ことなのではないでしょうか。

例えば学校や家庭、さまざまな場面で若者から「エロバナシ・猥談」が出た瞬間がチャンス！一緒になって茶化したりごまかしたり、武勇伝を語ったり、「臭い物にフタ」をして、なかったことにしたりしないこと。その裏にある「性」について知りたい気持ち、わからない・モヤモヤ・戸惑いの気持ちを受け止め、一緒に悩み、戸惑いも共有すること。

あなたが知らないこと、経験していないこともあるでしょう。でも、恥じて卑下するのではなく、時にはともに調べ、考え、「楽しく」語り合うこと。その中で「自分も相手も尊重するための人権としての性」という視点を、日常生活にどう生かすことができるのかを探っていくことが必要です。

そして、もしもあなたが、かつて思春期に男らしさで葛藤したことがあるのなら、その時の経験や想い、今思えば間違っていたこと、他者との関わりの中で戸惑い傷つけてしまったことを、何を話すか話さないかの境界線は保ちながら、思春期の若者と分かち合ってみることができます。直接自分の経験を語ることに抵抗があれば、男の子たちが自分で見て、学べる情報へのアクセスの仕方を伝えるという方法もあります。

自分の想いを語り、ともに悩み、考える。そのような姿は、これまで締め付けられてきた男性イメージや、男らしさからの解放につながることはもちろん、「性」の話題を茶化さない、ごまかさないオトナの男性がいることを伝えていく大きな一歩になります。

今必要な「分かち合う連帯」

「男は稼いで家族を養って一人前」「童貞を早く卒業して、パートナーを見つけて結婚して子どもを持って独り立ち」「弱みを見せず我慢し、どんな苦労も乗り越える」……。男性は、このような男らしさの競争に躍起になることで、女性に対して優位な立場を維持してきました。

男性の中にも多様性があるとはいえ、大きな枠組みでは、気づかないうちに、気にせずとも、女性と比較しても多くの「特権」が与えられています。その特権を守るために、男性同士でプレッシャーを掛け合い、関係性の中で他者を傷つけながら、男らしさを獲得しようとする——。

それがDVをはじめとする性暴力や、男性の自死の多さ、相談のしづらさによる男性の孤立につながっているのなら……。女性を、他者を、そして自分を傷つける暴力につながるような「男らしさの連帯」は、まだ必要でしょうか。

今必要なのは、女性の声を聴きながら、男同士で男らしさについて語り合う、当たり前とされてきたことを見つめ直し、言葉と気持ちを「分かち合う連帯」なのではないでしょうか。

また、語り合う中で出てくる苦しみやしんどさは、決して男同士で完結するものではないはずです。男同士で語り合うその先には、女性に対する暴力に反対し、社会全体にはびこる性差別の解消を目指してアクションする「連帯」にもつながるはずです。

今、青春を謳歌（おうか）する男の子、性別を問わずさまざまな若者たちに、自分や他者を苦しめ傷つけるような「男らしさの連帯」ではない「分かち合いの連帯」を、あなたから、伝えてください！

制作メンバー一同

指南書 「男らしさ」を考えるブック・WEBガイド

BOOK『非モテの品格 男にとって「弱さ」とは何か』

杉田俊介著
2016年10月/集英社
「虚勢」としての男らしさにとらわれることなく、男性たちが自分たちの「弱さ」と向き合いながらポジティブに生きる方法を探る。

BOOK『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた あなたがあなたらしくいられるための29問』

一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同著/ 佐藤文香監修
2019年6月/明石書店
ジェンダーに関する、大学生による29のQ&A。真摯で誠実に書かれた文章が、あなたらしさを支える。

BOOK『マンガでわかるオトコの子の「性」 思春期男子へ13のレッスン』

染矢明日香著/村瀬幸浩監修
2015年6月/合同出版
聞きづらい、言いづらい……でも、これだけは伝えたい！子どもだけでも読み進められるので、身近な思春期男子にまず届けたい。

BOOK『これからの男の子たちへ 「男らしさ」から自由になるためのレッスン』

太田啓子著
2020年8月/大月書店
2人の男の子を育てている女性弁護士による「有害な男らしさ」解体に向けた1冊。事例も豊富でわかりやすい。

BOOK『男性の非暴力宣言 ホワイトリボン・キャンペーン』

多賀太・伊藤公雄・安藤哲也著
2015年11月/岩波書店
カナダ発祥・女性に対する暴力撲滅を訴えるホワイトリボンキャンペーンの日本での活動などの紹介。巻頭に「男性非暴力宣言」。

WEB 性の悩みにこたえるサイト「セイシル」

https://seicil.com/
中高校生が抱える性の悩みにこたえるWEBメディア。性に向き合う力を育む。大人も一緒に、知ろう、話そう、性のモヤモヤ。

Gender Hand Book vol.2 #ボクらは誰も傷つけたくない「男らしさ」の謎を探る冒険

【発行】公益財団法人 京都市男女共同参画推進協会
〒604-8147　京都市中京区東洞院通六角下る御射山町262番地
TEL:075-212-7490　FAX:075-212-7460　WEB:https://www.wings-kyoto.jp/
【企画・編集】(公財)京都市男女共同参画推進協会／(一社)ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン
【デザイン】松田明功(スタジオ・ボウズ https://studio-bouzu.net)
【協力】(公財)京都市ユースサービス協会
2020年11月発行

暴力を選ばない、男たちのアクション
WHITE RIBBON CAMPAIGN JAPAN
wrcj.jp